

新美術
時評

近藤誠一

人類の歴史は権威との共存と闘いであった。古代は神の権威、その後は王や独裁者の権威との駆け引きが人々の生活を規定した。17世紀の主権国家の成立は教会という権威からの解放、フランス革命は絶対王政からの解放を求めた戦いであった。

こうした経緯を経て、人類は個人の自由を基盤とした近代民主主義という制度を確立した。冷戦の終了は、人類がこの究極の目的地に達した証であると位置づけられた（F・フクヤマ『歴史の終わり』）。

しかし今の世界の混乱は何なのか。自然破壊や殺戮、分断、そして格差の拡大は、人類がことの本質を忘れ、経済成長主義、効率至上主義などの概念に翻弄されていることを示している。

カネとテクノロ

ジューを手に入れた超富裕層が新たな権威として君臨している。

これは欧米が、近代文明システムを普遍的なものとして世界に広めてきたことの負の遺産である。その奥にある近代合理主義が近代という美名の下で、グローバリズムやコンプライアンスなどの様々な規律を課した。それが途上国や、ロシア、中国等の新興大国の息苦しさや反発を招き、権威主義の台頭を招いている。

しかもこの流れは遂に戦後のリベラルデモクラシーの急先鋒であった米国にまで及んだ。ト

ランプ大統領の再登壇は、近代理念という権威が次第に米国民衆の生きづらさを生んでいることへの反動なのだ。民主的な権威を否定してきた欧米が、知らず知らずのうち新たな権威社会になることで、それに立ち向かう独裁者を内外で生むという皮肉な現象となっている。

フォーラムとしての 大阪・関西万博へ

は、後者の重要性に気付いている。

そうであれ

歴史は決して進歩してはいない。循環しているだけなのだ。権威に息苦しさを感じて反乱を起こし、打倒したものは、いつの間にか次の権威となって社会を支配しようとする。これは人間の性なのかも知れない。

ここで美術に話を転じてみる。美術の発達を支えてきたのは権威であった。芸術は、古代においては神のため、中世では王のため、植民地時代は宗主国の覇権の象徴のためにあり、彼らの庇護の下で発展した。カネと権力がアーティストを育て、作品を展示する仕組みとしての

ミュージアムを生んだ。ミュージアムの草分けたる大英博物館ができたのが1753年という、植民地主義の真っただ中であり、その展示品の多くが植民地からの収奪品であったことはその象徴である。

だがNYのブルックリン博物館の館長を務めたダンカン・キヤメロン氏によれば、博物館には2種類の性質がある。ひとつは評価が定まった「至宝」を客が拝みに来る、権威の象徴である神殿（テンプル）としてのミュージアム。もうひとつは、未知なるものに出会い、対話が始まるフォーラムとしてのミュージアムだという。これまでの博物館は前者中心であったが、いま世界の博物館は、後者の重要性に気付いている。そうであるば、今年の我が国最大の博物館といえる大阪・関西万博も、最先端のテクノロジーの粋を競い合っ、訪れるひとに「技術崇拝」を押し付ける「テンプル」であるだけでなく、人間とは何か、どう生きるべきかについての自由な対話呼び起こすフォーラムとなるべきではないか。そうしてこそ危険な方向に向かいつつある文明の流れに一石を投じる、歴史的万博となるであろう。それがテーマである「いのち輝く未来社会」をデザインするということなのではないか。（近藤文化・外交研究所代表